

第85回 日文研フォーラム



「能における『草木成仏』の意味」

“The Secret Life of Plants in the Nō Theatre”



マーク・コウディ・ポールトン

Mark Cody Poulton

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

能における『草木成仏』の意味

The Secret Life of Plants in the Nō Theatre

● 発表者 ●

マーク・コウディ・ポールトン

Mark Cody Poulton

Assistant Professor, The University of Victoria, Canada
Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



1996年5月28日(火)

発表者紹介

マーク・コウディ・ポールトン
カナダ・ヴィクトリア大学助教授

Mark Cody Poulton

Assistant Professor, The University of Victoria, Canada

- 1955年 カナダ生まれ
1974-75年 名古屋の南山大学で日本語研修
1976年 トロント大学（東アジア研究）卒業
1976-78年 関西学院大学研修生（日本史）
1985年 トロント大学修士号取得（日本文学専攻）
1990年 トロント大学博士号取得（日本文学専攻）
- 1980-81年 トロント公立図書館広報業務
1981-83年 在トロント日本領事館日本インフォメーション・センター
広報担当官
1984-85年 トロント大学東アジア研究学部助手（日本語・日本文学）
1986-88年 トロント大学東アジア研究学部講師（日本演劇）
1988年- ヴィクトリア大学太平洋・アジア研究学部助教授（日本語・
日本文学・日本演劇）
1995年1月-7月 国際日本文化研究センター客員教授

主な著書：

- “How do Goblins Talk? Izumi Kyoka's Translation of Gerhart Hauptmann's *Die Versunkene Glocke*,” *Literary Studies East and West*, Vol. 5, Honolulu University of Hawaii Press, 1992.
「言葉のアニミズム－泉鏡花における自己と自然」、平川祐弘他編『アニミズムを読む－日本文学における自然、生命、自己』新曜社、1994
“Drama and Fiction in the Meiji Era: The Case of Izumi Kyoka,” *Asian Theater Journal*, Vol.12, No.2, 1995
“Metamorphosis: Fantasy and Animism in Izumi Kyoka,” *Nichibunken Japan Review*, No.6, 1995

能における草木成仏の意味

I

私はこれまで近代日本文学と演劇―特に泉鏡花―を中心として研究してきたのですが、最近と同じ日文研に所属しているルービン先生のように、能に対する関心が高まってきました。私の能の研究はそれほど進んでいないし、自分がまだ素人だと思いますが、ここで草木―つまり、草や木―が主題になっている能について、誠に粗末な話をさせていただきますと思います。

カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州のクテナイ(Kootenay)山脈に、「歌う森」という原生林があり、その森に入った人がその木が歌うように聞こえたことがあります。木の枝に伝わった風の音が起こした、ただの聴覚的な幻覚だったのかも知れませんが、その地方の原住民のインディアンたちにとって、その森に宿っている神々が本当に歌って下さっていると信じています。また、私の住んでいる西海岸のビクトリアあたりの原住民のセーリッシュ(Salish)族にも、似たような信仰や伝説がたくさんあります。冬の暗い、雨の降る日々になると、山から神々が人間の世界を訪れてくると彼らは信じています。神々に取り付かれる、いわば神懸

かりのようなもので、人々が踊ったり歌ったりする祭りがあります。その神を迎えるために山で修行をし、身を清めます。そうすると、自然に山から歌が聞こえてくるのです。その歌は、松か杉が伝えたもの、あるいは動物か昆虫が授けた歌だかも知れません。その歌をいただいた人が村へ帰り、その“Big House”（みんなが共同で使っている建物）で授かった歌を歌い、踊りを見せるのです。

ビクトリア市内から空港の方へ行く道がその途中で例のセーリッシュ族の居留地を通ります。私は二年前日本へ来る機会があり、その（居留地）を通ったときに道端で冬祭りのための修行をする少女を見ました。年輩の女の人に手を引かれ、編笠やわらじ・脚絆のような姿でした。私は、日本の芸能の原始的な風景を垣間見た気がしました。

II

自然現象に魂が宿るといふ信仰は、ご承知のように、日本で古くからあり、どちらかといえば神道的な考えです。しかし、「草木成仏」というのは、文字通りに仏教の発想です。これは、我々現代人にとってちょっとピンと来ない観念だと思えます。私は仏教の奥が深い思想を論じる余裕もないし、またその知恵と自信も

ありませんが、ここでは能の話にしぼって、「草木成仏」ということはどういう意味を持つか、を少し考えてみたいと思います。

自然界のあらゆるものに魂が宿り、そのものが救済の対象にもなる、という主題の能がびっくりするほど沢山あります。およそ四十曲にのぼると思われませんが、私の検討した限りではその中で花や木の精をシテとする能が十五曲ぐらいあるようです。鳥や虫が主題あるいはシテとなるものもありますが、四つ足の動物は（狂言を除いて）能舞台にあまり見られないのは興味深いことだと思えます。そして、草木の中でも、能の主題にされるのは、桜、梅、松、藤などに極めて限られています。ちょっとふざけたような問い掛けですが、なぜオットセイやヘチマのような動物や植物が能の主題にならないのでしょうか。動物は、「石橋」という曲があります。その典拠がやはり中国のもので。動物の出る話は日本の演劇にもたくさんありますが、「葛の葉」や「義経千本桜」など文楽や歌舞伎の芝居に出て来る狐のようなものは、いわゆる「異類婚姻譚」のパターンに当てはまり、能ではこのパターンはあまり主題にされません。能はより象徴的な、しかも抽象的な演劇なので、生々しいものを好まないようです。

また花の方は、勅撰集で詠まれていない花は謡曲の雅の世界にも出て来ないの

です。能に描かれている自然は、確かに美しいですが、極めて幅の狭い、洗練された世界です。

それはともかくとして、能のように植物を主題とする演劇は世界的にも類例を見ません。おそらく一般の西洋人に、「高砂」や「杜若」を筋だけ説明したら、お伽話と思われるでしょう。西洋の伝統演劇、そして日本の近代演劇では、社会や人間の葛藤が重要なテーマですが、花や木は先ず話（あるいは、芝居）にはならないのです。そういう意味では、能はいかにも内向的であるいは人間を超越した存在を描く演劇と違って良いでしょう。西洋人である私が能を観ていると、或モノの魂を歌う美しい詩に溶け込んだような気がします。そのモノの魂というのは、場合によって一人の人間であり、また「井筒」や「松風」のように、シテがモンタージュのように複数の人間にもなります。また、代表的な夢幻能では、その主人公が疾くに亡くなった人間の靈魂のこともあります。そういえば、能では主人公が桜や松の精であるのもそんなに不思議はないでしょう。

ところで、ここで私は「シテ」と「主人公」という言葉を漠然と使っています。が、やはりその意味の違いに注目する必要があると思います。シテというのは、厳密に言えばただの役割なのですが、主人公というのは人格を表わします。シテ

の人格がそんなにはっきりしたものではないので、ここで他の演劇とのアイデンティティに対する大きな違いが見られるでしょう。なお、演劇では「主人公」の代わりに、「登場人物」という用語がよく使われていますが、この種類の能では（変な言い方ですが）そのシテを「登場植物」と名付けたいです。

再び話に戻りますと、草木が主題となる能は大ざっぱに言って、三種類に分けられると思います。

① 一つは、花や木がある人間の魂の象徴となる謡曲です。その例は、

☆「東北」(前ジテは梅の精で、後ジテは和泉式部の靈魂)

☆「半部」(花の夕顔が同じ名の、光源氏の恋人となる)

☆「女郎花」(シテの妻が川に身を投げ、その靈魂が花となる)

などが知られています。

その他に、「松風」や「杜若」は似たような話があり、場合によって、そのシテが人間か花になり、あるいはシテが草木の精か人間の靈によって取り憑かれることもあります。

② また、一つの植物の精が出て来る能の種類があります。それは、ある自然現象が人間ではなく、神か仏の化現、つまり化身であることです。「高砂」の

相老の松がその一例で、また「龍田」では、龍田姫という秋の神が紅葉でもあります。又、「梅」という曲のシテもやはり神木です。このカテゴリーは神道的要素が濃いのですが、植物が仏か菩薩の化現とするのは、「花月」では清水寺の柳が実は観音の化身という例もあり、「杜若」では花が象徴となった在原業平が歌舞の菩薩または陰陽の（男女の関係をとりもつ）神ともなる話があります。

③ そこで植物の精がシテとなる謡曲の最後のカテゴリーは、草木が成仏する曲です。この中に「芭蕉」、「西行桜」、「藤」、「遊行柳」などがあります。その典型的な筋は、ある旅の僧が歌に詠まれた名所を訪れ、その由来を在所の者にたずねる。その在所の者は妙に詳しい人で、自分がその木の精であると明かすと、消えてしまう。夕方になると、その木の精が再び現れ、旅僧の誦経のおかげで舞を舞い、最後に成仏する、というような簡単な筋書です。

III

では先ず、最も仏教思想が濃い「芭蕉」という曲を見てみましょう。これは花のない芭蕉が法華経のおかげで妙なる法の花を咲かせるというのです。舞台が中

国でいかにもエキゾチックな曲です。ある僧が世を捨て、日夜法華經を讀誦して山で素朴な暮しをしています。そこへある日突然、一人の女が訪れてきて、「この御經を聴聞申せばわれ等如き女人非情草木の類までも頼もしくこそ候へ」と言つて消えてしまいます。その晩僧が読經すると芭蕉の精が再び女の姿で現れ、草木成仏の教えをたたえ、舞を觀せます。

この芭蕉はまさに法華經の思想を劇化したと言つてもいいでしょう。このお經に言及したり、あるいはその暗示が数カ所に出ています。

しかし芸能で説教をするとなると、そこには一種の違和感が現われると思ひます。法華經の藥草喩品という一章を引用しますが、その意図は、草木の成仏を説くのではなく、人間のための普遍的な救済論なのです。「芭蕉」では芭蕉の精が主人公になるから、草木の救済がフォーカスになってしまいます。

この曲は、芸術を方便として法華經の功德を説く能ですが、神道の神々をたてる「梅」という曲に少し似ている点があります。どちらの曲も宗教の教訓のようなもので、そのため芸術品として少し輕妙さに欠けている気がしてなりません。

IV

そこで、このような主題が効果的な演劇になりうるかという疑問が浮かんできます。

草木を主題とする謡曲は、「高砂」のような、いわゆる脇能あるいは神能もあり、現在能といわれる、比較的劇的な能が含まれています。しかし、圧倒的に多いのは、「鬘物」あるいは「三番目物」といわれる夢幻能で、落ち着いた幽玄のあじわい深い能です。特に草木が主題になると、西洋演劇で見られる人間的な意志の衝突や心の中の葛藤の描写はそれほど表わすことが出来なくなるのです。世界演劇の中で、最も反劇的な演劇は能だと言う人が多いのもうなずけます。そして、能の中でも最も反劇的な曲とは、三番目物だと言ったら間違いないでしょう。特に我々人間の荒れ狂う世を捨てた旅僧と静寂な草木との出会う世界は劇的な可能性が最も希薄でしょう。しかし、劇的な要素が全くないとは言えません。実に面白い話が沢山あります。少々例を上げましょう。

「墨染桜」という曲があります。ここで、仁明天皇の崩御を悼んで出家した峰雄という僧は、天皇がご存命の間寵愛した深草の桜を見に行きます。ちょうど花が咲く頃で、この桜もやはり満開ですが、僧が「深草の野辺の桜し心あらばこの

春ばかり墨染に咲け」と詠み、桜の情けなさを咎めます。そうすると、桜の精が現れ、今の歌の「この春ばかり」を「この春より」に直してくれたら、桜でありながら自分も出家して峰雄の弟子になると誓います。その晩、桜の精が再び現れると、人が皆花の衣を着るようになったのに、自分だけは墨染の喪服を脱ごうとも思いません。それなのに、その「苔の袂」が涙に濡れてしまった、という歌を詠んで霞と雲の中に消えて行きます。

また「六浦」という曲は「墨染桜」に少し似た話ですが、ここではシテが楓の精です。ある都の旅僧が相模さがみの国六浦の称名寺を訪れると、時は秋で山々の紅葉が盛りですが、この寺の庭の楓だけが紅葉しないのに不思議に思います。そうすると、一人の里女が出て来て、昔、為相ためすけという中納言がこの寺を訪れた時、この一本ひともとが山々の木より早く紅葉しているのを見ると、「いかにしてこの一本にしげれむ、山にさきだつ庭のみみぢ葉」という歌を詠んだ、と説明します。この楓がその歌を聞いて、自分はおつかましいものだと思ひ、これから身を退くのが天の道だと覚悟して、あれから紅葉しなくなったのです。この話を聞く僧は感嘆して、楓をほめる歌を詠みます。

ここでは「墨染桜」のように、ある木が自分が話題になった、人間の歌に反応

し、自然の成り行きを背けるようになります。こういう風に桜も楓も「出家」して、仏法によって教化されるのです。これは文字通りの草木成仏というものの証明になるでしょう。

こういう自然の成り行きを逆転させる奇跡はよく能に現れます。「老松」の松と梅の精は、主の菅原道真を恋しく思うあまりに、その流された筑紫の安楽寺へ飛んで行きます。又、「高砂」での相老の松も、住む所が遠く離れてもむつまじい夫婦でもあり、時々逢いに行くこともありませう。いづれも自然のもですが、自然界の法則には従っていません。そこで、その奇跡により、あるものは仏になり、あるものは神になるのです。いづれの例も草木が人間的な忠実さを現わします。

こんな飛ぶはずもない草木が謡曲のシテになると、「飛んでもない」話が生まれます。しかし他の場合には、草木は自分の自然を守り、物事なるままにしておくこそ、完璧に自分の美しい性格を示し、神か仏にもなれます。季節の移り変わりなどが仏教では無常の譬えになりますが、その自然の成り行きが又違う適切さの印にもなるのです。「高砂」では、「草木心なしと申せども花実の時たがえず」という条があり、又、「西行桜」に「草木国土おのづから見仏聞法の結縁なり」とまり自然における一切のものが仏を見て説法を聞いている、という条があります。

これもまた、「法華経」からの引用です。

こういう叙述は自然の美をたたえ、自然を神化していますが、これはとにかく自然の詩的な描写に留まり、ストーリーの筋を進める訳に行きません。草木がモチーフとして取り扱われると、どうしてもそれを人格化せざるをえません。という、能の世界でも非人間的な存在を創造することが出来ないような気がします。人間はどれほど自然との共存が出来ても、非人間的な生命は人格化されないと話にならないのです。人間は自分の環境にある諸現象を外よそからながめ、ある程度その振舞を観察した上で理解することは出来ませんが、そのもの（動物であり、植物であり）がもし魂か意識があったとしても、その内なる生命を理解する限界がきつとあります。そういう意味では、能は神道と仏教の自然観が背景にあっても、人間中心論的な立場からさげられない所があります。あるいは、さげようとしたら鬘物に見られる反劇的な、動きたる絵、あるいは美しい叙情詩のような芸術作品が生まれます。そうした理由で、人格化しないと、草や木が出る曲は大分劇的な性格がおとろえます。

しかし、こういう曲は劇的な性格が全くないとは言えないでしょう。劇的な感情やなやみが人間界から伝わってきます。ところがそれだけではありません。草木がシテとなる曲の最も劇的な要素というのは、登場植物の人間性と非人間性との衝突から来ると思います。先に私は鬘物が美しい叙情詩のようなものだと言いました。その叙情詩の「情」（つまり情け）は一体どこから来るでしょうか。こういう曲では、その壮麗な情緒の担い手は人間ではなく、桜や楓なのです。これは案外効果的に――つまり劇的に――活用しています。能によく現れるパターンは、草木のシテが非情であるはずなのに、人間よりもすぐれた、美しい感性を示している。でもそれだけではありません。シテがその感性を人間に認めてもらいたいのです。人間の方は、有情のほうですが、実は草木に情の^{なさけ}ことをおそわることが沢山あるようです。そういう意味で、桜や楓や松が登場する能は、仏教での通常な知恵を逆転させる要素があります。沢山の謡曲はこのパラドクス――つまり逆説――のピボットで回転しています。

人間は有情のものですが、能の典型的なワキは、この世を捨てた「心なき」僧侶として表現されています。そういう点で人間のワキが植物のシテに似ています。

草木が非情無心であるとは、能の一種のきまり文句になっています。とは言え、このきまり文句が必ず逆説的な活用か言い回しの形で言及されています。例えば

「草木心なしと申せども」(杜若)

「花葉様々の姿を心なしと誰かいふ」(六浦)

「げにや心なき草木なりと申せども」(老松)

「高砂住の江の松は非情のものだにも」(高砂)

など、いくつも例があるのです。「草木心なし」と云々しながらも、実はそうではない、「心あり」と暗示しているのです。草木の能は、人間的な植物と、植物的な人間との体験・対立を描きます。花と人が言葉を交わし、やがてお互いに「心」が通うようになる、人間のワキは自分が実に情けないものだとな得するのが(変な言い方ですが)こういう能の落ちなのです。

この非情・有情という分裂は「情」ということに潜在する二つの意味を弄もてあそびます。仏教では、「情」つまり Sentience というのは意識という意味で使われているが、一般の意味は「情け」、つまり「感情」あるいは「感性」というのです。正統な仏教では、有情のもの(つまり人間)でないとな成仏が出来ないという教えがあります。成仏するために自分の感情―欲望や妄執―を捨てなければなりません。

そういう意味では、修行するものは植物が本来自然に到達した人間を荒れ狂わす感情を浄化して亡くした世界に近づこうとしています。

しかし、能における草木の描写は、それほど純粹なものではありません。先ず、前に説明したように、草木に人間的な感情などを与えないと、物語が演劇として成り立てられないのです。文学では、こういう風に無生物に人間的な感情を与える表現法は、“pathetic fallacy”——つまり感傷的虚偽といえます。草木が出る謡曲も確かにそういう傾向を避けられません。ところが、幸せの松や悲しい桜といったような単純な描写も面白くないのです。能の面白みはやはり、もっと複雑で、先に申し上げたように「有情非情」という観念に潜む矛盾あるいは曖昧さから出て来ます。要するに、「情」あるいは「心」という言葉は、能では極めて皮肉に使っています。

こういう「心」の論争が誠に巧みに取り上げられている曲は、「西行桜」です。時はちょうど花盛りの頃です。僧で偉大な歌人でもある西行は、一人で静かに京都西山の庵で暮していますが、庭にある桜があまりきれいなので、町からその花を見に客が大勢やって来ます。西行は既にここが花見禁制と伝えるように下男に指図しましたが、花見の連中が折角来たからそれを気の毒だと思ふ西行は入れさ

せてやります。それでも西行は困った気分が残り、その恨みをこの迷惑のもと（庭にある桜）に移します。そして「花見んと群れつつ人の来るのみぞ、あたら桜のどがにありける」と詠み、「こんな大勢な人が花を見に来るのはお前のせいだ」と、この桜を咎めるのです。

そうすると、この老木の中から桜の精が出て来、「埋木うもれぎの人知れぬ身と沈めども心の花は残りけるぞや」と言って、西行の歌があまり不公平だ、情けない、と答えます。この桜の論理は実に面白いです。先ず自分は西行の歌に心が傷つけられたと言いますが、なぜ西行の歌が不公平かと説明すると、ただの草木だから自分には何も罪がないと言います。（引用）「非情無心の草木の花に浮世のところがあらし」。傷つけられる心はありますが、罪を犯す心は決してない、という感性は、まるで子供か少女のようなものです。この精は普通に現れている桜の精と違って、老木だから老体で皴尉しむの面で現れます。

すなわち、花を愛する西行と西行に愛される花とは、そんなに違いはないようです。つまり、この桜の老木は西行の心理の化身に当たります。この精が「夢中の翁」と言われています。この浮世をうるさく思う西行は、若者たちのどんちゃん騒ぎをいやがる気むずかしい老人のようですが、それこそ人生や自分の青春に

対しての未練が漏れてきます。ところが西行は花を好む歌人で有名なのです。この庭の桜をあまりにも愛しているから、一人占めにしたのです。花を恨むのではなく、人間の社会をいやがるのです。しかし、この心境は自分の花を喜ぶ人間性を拒否するものです。

こうして花と人との対立で始まった「西行桜」では、その対立が人間と自然とではなく、人間の心の中にある事だと次第に明かされてきます。この花と心との分裂は、実は又の妄想なのでした。

この花と心の真の融合は、並列と対照また修辭法によって暗示されています。西行とその下男は掛け合いで「貴賤きせん群集ぐんじゅうの色々に心の花も盛んにして」、「昔の有様」と謡って、花見の客のにぎわいを季節の移り変わりと譬えています。ここで「心の花」という文節ぶんせつで外なる自然が内なる人生にたっぷりしみ込まれています。こうして花見の客は花との一体感が見付かったという速記的な表現で現われています。それに対して、西行はまだ「心ことなる」人で、花を楽しみますが、社会とは同調出来ません。「心の花」という文節をひっくり返すと、「花の心」になります。これは桜の精の気持ちの形容で使われています。「埋木の人知れぬ身と沈めども心の花は残りけるぞや」。

能や和歌では似たような表現がよくあります。「西行桜」が引用した「山家集」の西行の和歌では「心を染める」色や花の言及がよくあります。同じように「龍田」のクセの段では、地が自然を称えながら、「然れば代々の歌人も心を染めてもみぢ葉の龍田の山の朝霞」云々と謡います。この例で見られるように、能のくだりは連歌的な飛躍でイメージの連想が理屈なしで次々とモンタージュのように人間の心境と自然の諸現象との融合を強めます。

「心を染める」といえば、衣裳との連想があります。「芭蕉」では木の精が最後に成仏すると、その心と自然との一体感を衣裳のイメージで強調しています。

「氷の衣、霜の袴霜の経露の緯こそ、弱かりし草の袂も、久方の、久方の天つ少女の羽衣なれや」云々。こういう風に自然を人格化すると同時に、有情というものを自然に与えるのです。

「西行桜」は花尽して終りますが、これは京都の花見の名所のただの目録ではないし、客観的な自然描写でもありません。前場では桜の精が「浮世と見るも唯その人の心にあり」と言って、西行の厭世的な心境を注意します。そして、後場のクリ・サシ・クセの段の花の名所の物尽しでは、その様々の風景が仏典での名所に譬えています。この様に「西行桜」は言葉を以て聖なる風景を創ります。

能は、他の文学の形式と同じように、言葉で或る虚構の現実を創る芸術です。

(勿論、演劇ですからその外に舞や音楽も重要な役割をはたしますが、ここではルービン先生と同じく謡曲のテキストに絞りたいと思います。) 言葉で虚構の現実であるいは、現実の幻影といった方が正確でしょうか—を創るというのは、無言の自然を呼出し、それを心の動きに答えられるようにする一つの方法です。

この考えは、「高砂」で、誠に美しく表現されています。(引用)「有情非情のその声みな歌に漏るる事なし。草木土沙、風声水音まで万物のこもる心あり。春の林の東風とうふうに動き秋の虫の北露ほくろに鳴くも皆、和歌の姿ならずや。」

又、古今集の仮名序は、あまりよく知られていますので、ここでは長い引用を省略しますが、その冒頭だけを引用しましょう。

「やまとうたは、ひとの心をたねとして、よろづの言の葉とぞなりける。」

ここで私が注目したいのは、その言葉による人間の心と自然との統一です。これは又言語的に様々の方法で表現されています。歌は人間の「心をたねとして、よろづの言の葉」になる。人間の心の動きや行動や表現の仕方を自然現象と同じように取り扱われています。又、これは勿論比喻ですが、ただの修辭的な技法と

はなかなか思えません。確かにこういう譬えは、下手な歌人、あるいは永年の慣用では、ただのきまり文句のようなものになってしまします。しかし、日本最初の歌論であった古今集の仮名序や謡曲に見られる同じような表現に直面すると、こういう比喩が一種の信仰か存在論のようなものを暗示している、という気がしてなりません。

VII

一般的に言えば、能には人間の魂か草木の精は呪文か和歌によって成仏するというパターンがあります。しかも、ほとんどの場合では「西行桜」のように、一首の和歌がその曲の典拠で、また人間と自然との出会いの触媒のはたらきをします。歌に詠まれていない自然は先ず物語になりません。能で登場する草木もやはり「名にし負ふ」花や木であり、歌を詠む歌人やお経を唱える僧侶によって、その隠れたる自然が活動するようになる、という気がします。そういう意味で、能における草木は、言葉に極めて敏感です。歌に詠まれていない自然は、未知で無言です。その代わり草木に言葉を与えるのはだれでしょうか。勿論その歌人です。しかし、その草木に歌人に訴えるようなものがなければ、それは先ず歌になりえ

ないのです。

能の研究家であった金井清光氏は、「杜若」について、どうしてこの曲が在原業平かその妻をシテとしなかったかと問い、「杜若の精をシテとせざるをえなかった強力な制約が存在していた」と答え、その原形は植物の「魔術」を示す民族芸能にあったと推定しています。杜若や菖蒲の葉は細長く、剣のようにとがっているので、五月の端午の節句で魔除けに使われる風習が古くからあったのです。例えば神社に仕える早乙女たちがこの折りになると、家の中に閉じこもってしまいました。そして外部の邪気が入ってこないように、家の軒に菖蒲の花と葉をふきました。その他に菖蒲や杜若を使う五月の魔除の芸能がいくつあったようです。もし能の幽玄美の絶頂に立つ「杜若」の発生が民族芸能にあったなら、「西行桜」などの背景にも同じような民間信仰や慣習があったかも知れません。毎年行われている今宮神社の花鎮めも、草木の精が出る能と同じように、一種の鎮魂あるいは供養の儀式なのです。折口信夫によると一人称式に表現されている叙事詩や芸能は、神の託宣にあった。

「神、人に憑って自身の来歴を延べ、種族の歴史、土地の由緒などを陳べる。皆、巫覡（つまり、巫女）の恍惚時の空想に過ぎない。併し、種族の意向の上に

立っての空想である。」

と述べています。つまり、このような神々とのコミュニケーションは一種の共同幻想なのです。(こういった宗教的な要素や役割は、ほとんど現在観られる能にはないでしょう。その上、植物の精が現われる能が全部そういう原形をもっていた訳でもありません。数多くの曲が「単なる花や葉の美しさを強調する美辞麗句を並べて作り出され」た、と金井清光氏が指摘しています。)

こうして、民間信仰や民族芸能から生まれた能は、すぐれた芸術形式に成長してきました。自然に対する素朴な崇拜は、言葉の色に染められ、芸能品という、独立した生物に生まれ変わったのです。

私はあんまりにも現代人なので、草木が本当に口を利くとは信じられません。しかし、花鳥風月を友として、ある種の精神的な再生を感じる事が出来ます。そして、能を観ると、現代演劇や日本の他の古典演劇では経験したことのない感覚、しかし自然の中で感じたような精神的な状態を体験したことがあります。それは、なぜかといえば、謡曲の文学的な優秀とそれを演じる人たちのすぐれた芸によるのでしょうが、もう一つの理由があると思います。能がいくら芸術品になつたとしても、その典礼的な役割がまだ働いているような気がします。それは謡曲

の筋とその構成に深く刻まれているもので、人間や草木の鎮魂あるいは供養の形で表現されているのです。

能の公演で、私にとって、ある奇跡が起ります。それは、無言の草木に言葉を与え、非情無心のものに心を授けることです。しかし、この奇跡は芸術全般に係することです。芸術の使命とその妙は、そのそれぞれが使っている素材に、ある種の生命や感情を伝えることです。そのような訳で、能で現われている草木は、生の自然と違って、また別の理想上の存在を得るのです。

要するに、能における草木成仏とは、芸術による自然の教化——つまり、馴致（飼いならすこと）——を意味します。その成仏が本当の成仏ではない、芸術に立つての成仏なのです。日本文化で、こういった自然の教化が長い伝統があります。

この間の日曜日に、私は日文研のうしろにある山の方へ散歩に出かけました。その山の麓に桂坂野鳥園というバード・サンクチュアリーがあります。そこにあやめが咲いていましたが、私が訪れた日に人が鳥より大勢いました。そこから「鳥と遊ぶ道」で山を登りました。道しるべがちゃんとあり、木の幹にその名前が示してある札が掛かっていました。文字通りの「名にし負ふ」草木でした。

こうして日本の自然は何千年かの人間の居住によって馴致され、言葉の宇宙に

取り入れられてきたのです。「草木成仏」とは、ただ自然の馴致を意味するとして、その自然が人格化されるか、少なくとも人間の道具にされることになります。しかし、「草木成仏」とは、もっと重要な意味があると思います。それは「草木の成仏」ではなくて、「草木による成仏」というのです。つまり、人間は自然と付き合って初めて自分も同類の生きものだとなつたことこそ、救済されることです。能にはこういう教えがあると思えます。

発表を終えて

これまで泉鏡花を研究してきた私は、言葉と信仰に関心を持つようになりました。鏡花は「信仰の作家」といわれており、その作品に日本の民間伝承や信仰の要素がよく見られている。鏡花の小説と戯曲を理解するため、柳田国夫や折口信夫の研究が有効な手掛かりとなるのではないかと思ったのである。

その宗教性をもう少し手繰るために、日本人のいわゆる言霊信仰や折口信夫の古代文学と芸能に関する理論を今回の研究として取り上げたのであるが、具体的な例がなければ、この研究は理論に留まると思う。そのゆえに、ここでは能に現われている自然の描写について考えてみることにしたのである。能では、世界演劇で類例のないほど自然の現象を主題あるいは主人公にする曲がある。これは仏教の「草木成仏」の思想に明らかに基づいているが、神道の自然崇拜も勿論潜めている。しかし、人間は自然を芸術によって表現すると、自然はある程度人格化され馴致されるので、決してありのままに再生出来る訳に行かないことは言うまでもないだろう。にも拘らず、能で表現される自然はただの修辭的な表現に留まらない。能には典禮的な要素がまだ残っており、その背景となった自然に対する信仰は今でも幽かに仄めかされていると思う。

今年の日文研フォーラムで能についての発表はこれで二回目となった。そのためにいろいろお世話して下さい、司会もして下さい。臼井祥子さんとコメンテーターして下さい。光田和伸先生に心からお礼を申し上げます。

Cody Peterson

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIßEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	巖 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールバルス王伝説における主従関係の比較」
②8	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②9	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③1	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③3	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラル・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) J ürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトローブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 - 『黴毒』 の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスタ (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 —科举制度をめぐって—」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り — 平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880~1930」
64	6.5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6.6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6.7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9. 13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACE 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6. 11. 15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6. 12. 20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1. 10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミターージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミターージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2. 14 (1995)	嚴 紹 璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3. 14 (1995)	王 家 驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4. 11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7. 25 (1995)	崔 吉 城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9. 26 (1995)	蘇 徳 昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
78	7.10.17 (1995)	李 均 洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュースナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1. 16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

82	8. 2. 13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3. 12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
84	8. 4. 16 (1996)	モーリス・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
85	8. 5. 28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学・日文研客員助教授) Mark Cody POULTIN 「能における『草木成仏』の意味」
86	8. 6. 11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7. 30 (1996)	シルヴァン・ギニアル (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9. 10 (1996)	ハーバード E・プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
89	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国 東北民族学院助教授・日文研客員教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰」

発行日 1996年 12月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1996 国際日本文化研究センター

■ 日時

1996年5月28日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

